

書評

松崎朝樹 監訳

精神科診断戦略

モリソン先生の DSM-5® 徹底攻略 case130

上島国利

精神科臨床において正しく的確な診断は最重要課題である。妥当な診断こそ適切な治療に結び付き、さらには各障害の病態生理の解明に寄与するからである。

症候の記述を重視する操作的診断基準 DSM も、今や米国の基準という枠を越えて世界水準の診断基準となり、DSM-5® の邦訳は 2014 年に刊行された。

本書は、大学や個人のクリニックで多数の患者の診断や治療の経験を持つモリソン先生が、精神科領域で働く全職種の人々が DSM-5® をより効果的に活用することにより、正しい診断にたどり着くことを願って執筆したものである。その構成をみると、DSM-5® のほぼすべての項目に関して一定の方式に従って解説がなされている。モリソン先生は「私ならではの仕掛け」と称していくつかの工夫をしているが、第 2 章「統合失調症スペクトラム障害群」を例に取り順次読み進むと、以下のようになっている。

章の冒頭の「クイックガイド」では、診断要点と同様の症状を呈する疾患が記載されている。「はじめに」では、主症状、歴史、環境などを扱う。妄想、幻覚、連合弛緩、異常な運動行動、陰性症状などである。また他の障害との違いは、DSM-5® の採用している異なるタイプの精神病を区別するための 4 つの要素、つまり症状、経過、転帰、除外診断に従い解説される。経過に関しては持続期間が 6 か月以上であることを説明し、さらに以前の経過、病前性格、残遺症状も考察する。除外診断は、身体疾患、物質関連障害、気分障害が挙げられている。DSM-5® にはないその他の特徴として家族歴、治療反応性、発症年齢にも注目している。

次いでその障害群に属する個々の疾患を解説しているが、たとえば統合失調症については基本的パターン、頻度、慢性化、重症度、管理、認知機能の

低下、情動の不安定性、病識の欠如、睡眠の不安定、物質の使用、自殺について述べられている。「ポイント」は典型的疾患像であり、モリソン先生は典型例との比較は DSM の診断基準より有効なこともあると言うほど重視している。「注意事項」は「D を見逃すな！」とあり、「Duration (期間)」「Distress or Disability (苦痛と障害)」「Differential diagnosis (鑑別診断)」の三つの D への注意喚起がなされている。そして典型例 3 例を紹介し、それぞれ症状を DSM-5® の診断基準に照合し、また鑑別診断を慎重に行い、最終的に診断分類している。

本書では 130 例の症例が呈示されており、基本的背景知識を基に診断を進め、モリソン先生の解説を踏まえて最終診断を確定する過程を繰り返すことで、診断能力の向上に役立つ。経験の浅い医療者にとっては妥当な診断に至る重要な道程を学ぶこととなり、ベテランにとっては自らの診断の再確認に役立つ。

精神医学の特徴として、患者自身の体験や確信の内容を治療者が症状把握し記述することにより診療が成り立っていることが多い。この人間の心的機能の異常を個々に記述していく立場が記述的精神病理学であり、日常臨床において治療者は、丁寧、懇切な治療態度で患者と一定の信頼関係を築き、正確、良質な情報を得る必要がある。このようにして把握した症状を DSM-5® の基準に当てはめることにより診断は成り立つが、それには、治療者の精神病理学的素養や見識の醸成が強く望まれる。本書はその一助となるものと思う。

(昭和大学名誉教授)

●B5 664 頁 2016 年 5 月 定価：本体 6,000 円＋税 医学書院刊